

迷子になった入れ歯

中村 龍介

その日は朝から雨だった。電車を諦めて車で行くことにした。大きなクリニックのようだから駐車場は完備しているだろう。ナビの検索を「施設」に合わせ、クリニックの名前を入力。直ぐに出てきた。新横浜の近く、目的地まで三十二分とある。これなら電車よりずっと速い。

車を走らせながら、ここ数日間の目まぐるしい経緯を復習してみた。まず、S 大学病院で『肺気腫』と診断されたことが出発点だ。それと、ほぼ同時に以前から具合の悪かった下腹部のシヨリが、I 病院で『鼠径部ヘルニア』と診断されたことが重なる。

肺気腫は、薬や手術で治る病気ではない。生活習慣を改善するところから始めるので治療に時間がかかる。一方、ヘルニアの方は手術で簡単に治る。しかも面倒な手術ではない。先にこちらから解決しようと、I 病院に手術の予約をとった。

ところが、新しく私の主治医となったS 大学病院のH 医師は、別のことを言い出した。私の肺のレントゲン写真にある、かすかな影が気になるというのだ。念のためにCT 検査もやりたいと言い出した。通常、肺気腫患者にはCT を撮らない。だが、若手のバリバリ、H 医師には一つの成功体験がある。最近のことだ。ある肺気腫の患者を看っていて、念のためにCT を撮った。CT でガンの疑いが出たため、小さなガン細胞でも発見できるPET 検査の手配をした。PET とは『陽電子放射断層撮影』というもの。

ガン細胞が普通の細胞に比べて三〜八倍多くのブドウ糖を取り込むという性質を利用して、予めブドウ糖に近い成分のもの（FDG という）を体内に注射する。暫くして全身をPET で撮影すると、FDG が多く集まる個所が赤色で標示されるので、ガンの早期発見につながる。

H 医師は実際にその患者の微小なガン細胞の早期発見に成功、早期治療で肺がんを完治させたという経験を持つ。

H 医師にはその成功体験が忘れられないとみえ、私を柳の下のだジョウに見立てた感がある。ヘルニアは特に急ぐ病気ではないので、先に肺の検査を優先させたいとした。が、PET 施設は全国でも限られたところしかなく、S 大学病院では横浜市北部の分院に設備があるが、如何せん遠い。そこで、我が家からは遠くない新横浜のクリニックを紹介してくれたというわけだ。

家を出てから三十分ほどで目的地に到着。心配していた駐車場にも十分な余裕があった。このクリニックはPET 検査専門病院で、一般の外来は受け付けていない。人間ドックにも使われているようで、休憩室にせよ待合室に

せよ、ホテルのようで清潔感が漂う。

それに、大病院のようにむやみに待たせたりすることはなく、予定通りに全てが運んで気持ちが良い。

私の予約は十三時四十分。順番が回ってきた。看護婦の事前説明がある。身に着けたものは下着以外全て取る。特に金属製品は、腕時計はもちろん、入れ歯も外す。病院のパジャマを着て、検査室に入る。小学校の教室ほどの大きさの部屋の中央にPETの設備が据えられている。MRIの検査台と同じようなものだ。仰向けに寝ると身体全体が横に長い洞窟のようなどころに入れられる。その昔、回天という名の人間魚雷があつたと聞くが、イメージとしては、その中に入った感じだ。

さて、回天の中に入ってからはずっと目を閉じているので、外で一体何が行われているのかは分からない。機械は大きな音、小さな音を立てて動いている。すべて機械のなすがままである。

一時間も経ったころ、漸く回天の扉が開いた。

「お疲れさまでした。すべて終わりました」
身支度を整えると、最後に受付で丁寧な説明があり、会計を済ませて放免となる。

クリニックを出ると急に空腹を思い出した。朝から何も食べていないのだ。途中、駐車場のあるレストランで夕食を済ませ、六時頃家に帰りついた。

その夜、昼間の緊張からか、リビングの揺り椅子で眠ってしまった。夜中の十二時近くに目が覚めて、慌てて翌日の朝食用のサラダを作る。そして、寝る前の歯磨きに洗面所に向かった。

毎日、寝る前には入れ歯を外してから歯を磨く。入れ歯は眠っている間は外しておく。

洗面所で歯を磨く前に入れ歯を外そうと、口の中に手をやって始めて気がついた。入れ歯がないのだ。うたた寝したのでその前の記憶が定かではない。が、どうせ、その辺から出てくるだろうと高をくくったものの何処にもない。

クリニックに忘れてきた可能性を考えてみたが、帰りには夕食を食べた。食事をして入れ歯がないことに気づかないはずはない。

一夜明けて、もう一度心当たりを徹底的に捜してみたが、見つからない。左上の前歯から奥歯まで五本ほどがないのだから、左半分は全く噛めない。いずれ、右の歯がオーバーワークになって痛み出すことも予想される。

今年になって、失くす筈のないものを二つ失くした。ひとつは車のキー。最近のキーは各種のリモコン機能がついているのでかなり大きい。家の中の何処かに置いてそれが見つからないのだ。仕方なくスペアのキーで間に合わせる。

もうひとつの紛失物は眼鏡。普通にかけるものではなく、近くがハッキリ

見える眼鏡だ。本や新聞を読む時、また塾やエッセイ教室で重宝していた。毎回、書類を読むときだけケースから出して使う。それがケースごと見つからないのだ。これも、今は眼鏡を外して近くのものを見るようにしている。今度の入れ歯も簡単には見つかりそうもないように思う。何となく直感でそう感じるのだ。左半分が噛めないとなると大問題。仮に右の差し歯が外れたりすると、もう全然噛めなくなる。もうひとつ作るか。

早速、何時もの歯医者さんに電話してみる。ひよつとすると、カモがネギを背負って行くようなことになるかも…。

「下丸子の中村ですが…」

「お久しぶりです。どうかしましたか？」

「実は、入れ歯がなくなりまして…」

「なくなった？というのと、間違って捨てちゃったとか？」

「その可能性も否定できませんね」

「あの入れ歯は、もう七年くらい経ってますよね。新しく作りましょうか。前のが見つかった時は、スぺアということで」

「その場合の値段と納期はどうなりますかね」

「三十万円ほどだったと思いますよ。納期は三週間かな」

「三十万？他所の歯医者でも喜んでやりそうな値段ですね。納期の三週間も長すぎる」

「ちよつと、検討させて下さい。後ほど電話します」と一旦電話は切れた。十分後に電話があり、ネゴの結果十八万円、二週間で契約が成立。早速、型を取るために歯医者を訪問した。

この歯医者とはもう十年以上の付き合いだ。まだ前の家に住んでいた頃、直ぐ近くにある歯医者に通い始めた。その後、こちらは現在のマンションに転居し、歯医者は大通りに面したビルの一室に新しい診療所を開いた。

歯医者とか床屋は、一旦親しくなるとなかなか離れられないもので、今も車を飛ばして新しい診療所に通っている。

「この診療所の柱の二、三本は、ボクが建てたような気がするね」
診察台の椅子にもたれながら減らず口の会話が始まる。

「いいじゃないですか。もう、タイガースには四つも負けてるんだから」
歯医者は熱狂的なベイスターズ・ファン。行くと必ず野球談議になる。

「ベイは凄いいじゃない。貯金でしょ。阪神なんて借金三つだよ」

「中村さん、忘れないうちにお願ひですが、入れ歯の納期、二週間は無理。どうしても三週間かかります」

ドサクサに紛れて大事なことをコトもなげに言う。

「えっ、二週間で出来ないの？ 約束が違うじゃん」

「型は私が取りますけどね。型に合わせて歯をつくるのは職人さんです。」



目下、その職人さんのところに仕事が集まっているとかで……」

「ボクが現役のところは、納期が守れないとなると値引きしてたけどねえ」

「また、苛めないで下さいよ。たくさん値引きしたばかりじゃないですか」

医者とネゴしても最後に譲るのはこちらだ。入れ歯の納期も三週間ということでは納得せざるを得ない。

それにしても、上の歯が半分ないというのは噛めないだけでなく、他にも色々な弊害を伴う。まず、見かけが良くない。人前で笑うと、ハロウインのカボチャのようになる。更に、先日塾で学習指導していて気がついたことがある。英語のTHを発音しようと、舌先を上歯の裏側に持っていく、息を吐きながら声を出すと、ガラスの割れた窓に風を送るようなもの。スースーいうだけで、音にならないのだ。

この先、三週間も入れ歯なしということになれば、塾では発音の出来ない英語の先生。友人、知人との食事や会合でも半分歯なしのカボチャ面を下げて行くしかないのだ。入れ歯よ、いでよ！

【二〇一六年六月記 原稿用紙 約十二枚、課題「あめ」】